

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月18日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730522

研究課題名（和文） 多面的な思考を導くための効果的な教育プログラム開発の試み

研究課題名（英文） Development of an educational program to cultivate multiple thinking

研究代表者

小塩 真司（OSHIO ATSUSHI）

早稲田大学・文学学術院・准教授

研究者番号：60343654

研究成果の概要（和文）：二分法的思考とは、ものごとを白と黒、善と悪など極端な二項対立として捉える思考態度である。本研究では、この二分法的思考の基本的な性質を明らかにし、変容の可能性を探ることを目的とした。二分法的思考の持ち主は能力を固定的なものにとらえ、歪んだ身体イメージや摂食障害傾向に関連し、パーソナリティ障害傾向に関連することが明らかにされた。また、ディベートの授業において二分法的思考の変容の可能性が検討された。

研究成果の概要（英文）：Dichotomous thinking is an individual's propensity to think in terms of binary opposition. The aim of this study was to clarify the fundamental characteristics of the dichotomous thinking and to explore possibilities of transformation of such style of thinking. Studies showed that the dichotomous thinking tend to related to deem the human abilities more innate, to link to distorted body images and eating disorders, and to be associated with tendencies of personality disorders. Possibility to change the style of thinking was explored in a university course through use of debate.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学

キーワード：二分法思考，教授法

1. 研究開始当初の背景

ものごとを単純化して捉えようとすることは、人間の思考の本質的な特徴である。その最も極端な思考は、ものごとを「白と黒」「善と悪」「勝者と敗者」のように中間を排除した二種類のいずれかとして二項対立でとらえる、二分法的思考（dichotomous thinking）である。

二分法的思考は臨床場面でもよく見られることが古くから指摘されてきており、認知行動療法では、抑うつや境界性パーソナリテ

ィ障害における自動思考のひとつとしても取り上げられているが、二分法思考が必ずしも病理に結びつくわけではない。仲正(2008)は、このような二分法的思考の問題点として、「二項対立図式が際立つような争点が絶対にあるはずだ」と最初から決めてかかる傾向があるということを挙げている。そして、自分の立場が「善」で対立する相手の立場が「悪」であるという思考につながることから、対立する相手が「正しいこと」を言っていたとしてもそれを認めることがで

きなくなるという問題点が生じるという。このように、二分法的思考が自分自身や他者を認識することに向けられた場合には、他者への攻撃やいじめ、自殺といったより大きな問題に結びつく可能性も示唆される。実際にOshio(2009)は、二分法的思考と他者を過小評価・軽視する傾向との間に正の関連を見出しており、他者を不当に低く評価する傾向の背景には二分法的思考が関与していることがうかがえる。また、海外の研究においては、単純化された思考態度が保守的な政治態度に結びつくことが明らかにされている(Jost, 2006)。極端な政治的態度にも、二分法的思考態度が大きくかかわると考えられる。

このような二分法的な思考態度は、教育の中でも利用される。初等教育の段階においては、世の中の物事を理解する際に単純な分類を用いることは非常に役に立つ。しかし本来であれば、このような単純な二分法的な思考は学校段階を経ていく中でより多段階的・多面的で柔軟な思考へと変化していくはずである。ところが先行研究では、大学生であってもかなりの割合が二分法的思考を「好ましい見方である」と捉えていることがわかっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、二分法的思考をより柔軟で多面的な思考へと導くための効果的な教育方策を検討することである。そのため第1に、二分法的思考の特徴を十分に明らかにする。二分法的思考のもつ特徴を十分に把握することは、その問題点を明らかにすると同時に、どのようなアプローチで介入を行っていくかを考える上で大きなヒントとなるであろう。第2に、二分法的思考の変容の可能性を探る。グループワークやディベートといった、思考のスタイルがその活動に影響を及ぼし、またその活動から思考様式が変容しうるような活動に注目する。たとえばディベートは、賛成側と反対側に分かれて競技を行う知的なゲームである。この活動は、まさに二分法的な「敵と味方」による討論である。しかし、ディベートでは自分自身の意見とは逆の立場にたつことも求められる。したがって、それまで「敵」であった立場にたつ経験を重ねることにもつながり、単純な「敵」「味方」という二分法的思考を低減する可能性があると考えられるのである。このような具体的な教育活動を通して二分法的思考が変容しうることを示された場合には、その活動においてどのような要素が変容への影響力をもつのかを検討していく。そして第3に、二分法的思考を抑制するためのもっとも効果的と考えられる教育プログラムを開発する。

3. 研究の方法

二分法的思考については、その個人差傾向を測定するための二分法的思考尺度(Dichotomous Thinking Inventory; DTI; Oshio, 2009)を使用した。二分法的思考の基礎的な特徴を明らかにするために、質問紙法を用いて関連を検討した。また授業の効果を検討するために、短期縦断的に調査を繰り返した。

4. 研究成果

(1) 二分法的思考と好み

白黒を明確につける思考様式である二分法的思考が、日常のかつ身近な好みとどのように関連するかを検討するために、音楽の好みに注目して検討を行った。

結果をTable 1に示す。相関係数は低い値であったが、二分法的思考は、クラシックやカントリーの好みと負の相関、ロックやオルタナティブ、ソウル・ファンク、ヘビーメタルといった比較的リズムが明確な音楽を好む傾向にあることが明らかにされた。

(2) 二分法的思考と知能観

暗黙の知能感とは、知能とは何かという問いに対する個人の解答のことである(上淵, 2003)。この暗黙の知能観は、固定的知能観

Table 1 二分法的思考と音楽の好み

	Total DTI
<i>music preference factors</i>	
Complex and Conventional	-.15 *
Intense and Rebellious	.17 *
Energetic and Rhythmic	.12
Fast and Contemporary	.07
<i>music preference items</i>	
Pop	.07
Rock	.14 +
Alternative	.17 *
Soul/funk	.16 *
Heavy metal	.14 +
Rap/hip-hop	.12
Classical	-.23 **
Jazz	-.11
Religious	-.06
Blues	-.12
Country	-.14 +
Electronica/dance	-.01
Sound tracks	-.08
Folk	.06

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

Table 2 二分法的思考と知能観

	DTI総得点
暗黙の知能観 ¹⁾	
総得点 ²⁾	.20 ***
要領の良さ	.23 ***
効率の良さ	.15 **
頭の良さ	.18 **
成績の良さ・知識の多さ	.09

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

1) 高得点は固定的知能観を意味する

(実体的知能観; entity theory) と増加知能観 (incremental theory) を両極とする範囲の個人差として表現される。前者の極は知能が固定的であり容易に変化させることはできないという見方であり、後者の極は、知能は学習によって変化させることができるという見方を意味する。

大学生 311 名を対象とし、二分法的思考と知能記述リストを用いた暗黙の知能観の質問紙調査をおこなった。その結果、Table 2 に示されるように、二分法的な思考態度をとることは、固定的知能観の高さに関連していた。したがって、二分法的思考の持ち主は、自己や他者の能力、特に要領の良さや効率の良さ、頭の良さを生まれつきだと考える傾向にあることが示唆される。

(3) 二分法的思考とボディ・イメージおよび摂食障害

摂食障害の問題は一疾病の枠に留まらず、一般の青年においても極端なダイエットや過食などの問題が見られることが指摘されている (奥田, 2007)。またこのような食行動の背後には、極端な思考態度が関与すると言われる。たとえば Byrne ら (2008) は、二分法的な思考が摂食障害に関与することを示している。さらに、Wildes ら (2001) はメタ分析によって、西側諸国に住む白人女性はそうではない女性よりも摂食障害を呈しやすいことを示した。本研究は、二分法的思考が身体イメージや摂食障害に及ぼす影響を、日本人とロシア人の女性を対象として比較検討した。

調査対象者は、日本人女子大生・短大生 419 名 (平均 19.8 歳)、ロシア人女子大生 187 名 (19.7 歳)、計 606 名であった。両国の平均年齢に有意な差は見られなかった。二分法的思考、身体イメージ、摂食障害傾向 (EAT-26) を日本とロシアで使用した。

各得点について 2 国間の平均差を検討した。現実の身体イメージについては差が有意で

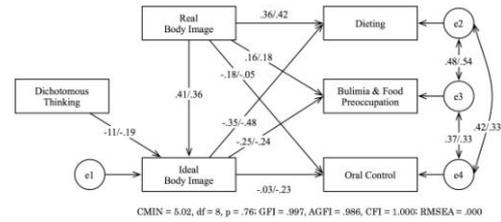


Figure 1 二分法思考から摂食障害への因果関係 (日本/ロシア)

はなく ($t = 1.08$, $n. s.$, $df = 604$ 以下同じ)、理想の身体イメージについてはロシアよりも日本の方が細身の体型となっていた ($t = 11.65$, $p < .001$)。DTI 総得点 ($t = 4.46$, $p < .001$) および EAT-26 の Bulimia ($t = 2.07$, $p < .05$) は日本よりもロシアのほうが高得点であった。

二分法的思考と現実の身体イメージが理想の身体イメージを媒介し、摂食障害傾向に影響を及ぼすモデルを仮定し、日本とロシアの多母集団の同時分析を行った (図 1)。日本でもロシアでも、二分法的思考は、理想の身体イメージをよりやせるようにさせる影響が見られた。日本では現実の身体イメージが Oral Control に影響するのに対し、ロシアでは理想の身体イメージからの影響が見られた (Figure 1)。

(4) 二分法的思考とパーソナリティ障害傾向
二分法的思考とパーソナリティ傾向との関連については、古くから指摘されているものの、その全体像は不明瞭なものである。また、DSM-IV-TR (APA, 2000) に示されているように、パーソナリティ障害は個別のパーソナリティ障害が 3 つのクラスターに分類されるという階層構造を示すことが予想されるが、このような構造の検討も十分に行われているわけではない。本研究では、パーソナリティ障害傾向がこのような階層構造を示すか否か、また二分法的思考がどの階層に影響を及ぼすのかを検討する。

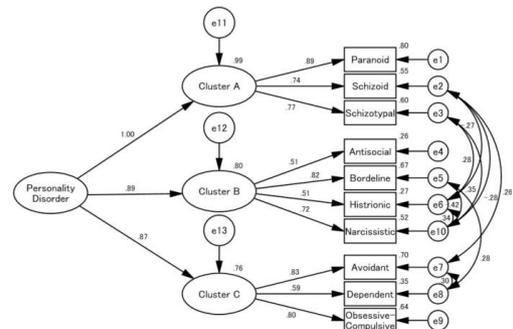


Figure 2 パーソナリティ障害

Table 3 二分法的思考の影響力

causal relation		path coefficient
model A		
	Personality	
DTI	--> Disorder	.432 ***
model B		
DTI	--> Cluster A	.320 **
DTI	--> Cluster B	.535 ***
DTI	--> Cluster C	.433 ***
model C		
DTI	--> Paranoid	.362 ***
DTI	--> Schizoid	.212 *
DTI	--> Schizotypal	.198 *
DTI	--> Antisocial	.390 ***
DTI	--> Borderline	.398 ***
DTI	--> Histrionic	.313 **
DTI	--> Narcissistic	.436 ***
DTI	--> Avoidant	.347 ***
DTI	--> Dependent	.258 **
	Obsessive-	
DTI	--> Compulsive	.367 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

大学生 152 名を対象に、二分法的思考とパーソナリティ障害傾向 (Ten Personality Styles; 10 PesT; 中澤, 2004, 2006) を実施した。

10PesT が階層構造を示すかどうかを構造方程式モデリングによって検討した (Figure 1)。適合度は $CMIN/DF = 1.49$, $GFI = .96$, $AGFI = .90$, $RMSEA = .057$ と十分な値を示した。

Figure 1 のモデルに基づき、DTI が高次のパーソナリティ障害レベルに影響する model A, クラスタレベルに影響する model B, 個別のパーソナリティ障害レベルに影響する model C を比較した。分析結果から model B の適合度がよく、二分法的思考はクラスタレベルに影響する可能性が示された。なお、DTI から各クラスタ潜在変数へのパス係数は .32 から .54 であり、すべて 5%水準で有意であった。

(5) ディベートの授業と二分法的思考

ここでは、ディベートを用いた授業に注目する。ディベートは、ひとつの論題に対して本人の価値観とは無関係に肯定派と否定派に分かれ、対立した意見を主張し合うものである。このような手法は、二分法的思考と親和性が高いと考えられる。しかしその一方で、ある論題に対して対立した立場が存在すること、双方が説得的な意見を展開する可能性があることも実感することができる。このような授業を通じて、二分法的思考が変容するの否かを、探索的に検討する。

2 年間にディベートの授業を利用した授業

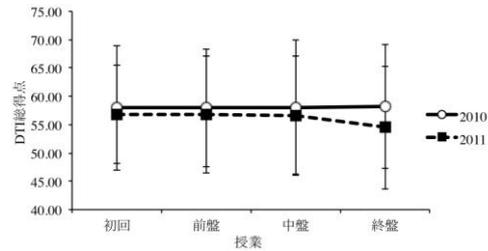


Figure 3 二分法的思考の変化

に参加した 71 名の大学生を調査対象とした。調査内容は、二分法的思考、活動評価 (その日の授業における自身の活動を 10 点満点で評価)、満足度 (“私は自分に満足している” という質問項目に対し、6 段階で回答) であった。毎回の授業終了時に授業内容を振り返り、次回の目標を記入するとともに調査内容への回答を求めた。第 1 回～第 13 回の授業において調査が実施された。

DTI 総得点及び各下位尺度得点について、初回、第 2～5 回 (前盤)、第 6～9 回 (中盤)、第 10～13 回 (終盤) の平均値を算出し、授業年度 (2010, 2011) × 授業時期 (4 時期) の分散分析を行ったが、いずれの得点についても有意な交互作用及び主効果は見出されなかった (DTI 総得点については Figure 3 参照)。従って、授業経験によって二分法的思考の得点は大きく変化しないと言える。

また、活動評価と DTI 得点との関連を検討したところ、有意な相関係数はみられなかった。従って、授業の内容がうまくいったかどうかの自己認識は二分法的思考と関連しなかった。

自己満足度は、DTI 総得点および特に二分

Table 4 二分法的思考と満足度

	満足度			
	初回	前盤	中盤	終盤
DTI 総得点				
初回	.19	.21	.24	.15
前盤	.27 †	.46 **	.50 ***	.31 *
中盤	.36 *	.48 **	.53 ***	.37 *
終盤	.25	.27 †	.35 *	.17
二分法の選好				
初回	.29 †	.27 †	.31 †	.21
前盤	.40 **	.45 **	.47 **	.33 *
中盤	.45 **	.42 **	.45 **	.32 *
終盤	.45 **	.32 *	.40 **	.28 †
二分法的信念				
初回	.00	.14	.09	.02
前盤	.13	.39 **	.44 **	.21
中盤	.20	.34 *	.38 *	.17
終盤	.20	.24	.28 †	.09
損得思考				
初回	.14	.03	.14	.11
前盤	.13	.10	.18	.03
中盤	.17	.15	.23	.12
終盤	.13	.09	.19	.09

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

DTI の他の下位尺度の相関係数は省略

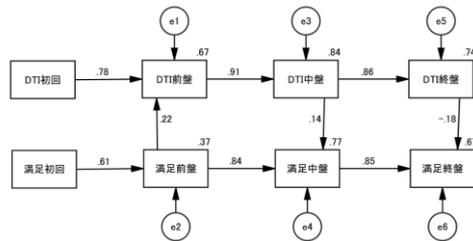


Figure 4 満足度と二分法的思考の因果関係

法の選好下位尺度との間で中程度の有意な正の相関を示した (Table 4)。先行研究 (Oshio, 2009) では、DTI と自尊心尺度が無相関であることが報告されている。時間軸を考慮すると、二分法的思考の高い者がディベートという授業場面で自己満足度を高め、さらにその自己満足度の高さが二分法的思考を高める様子が示唆される。

この点を明確にするために、同じ効果モデルによって因果関係の検討を行った (Figure 4)。その結果、授業の前盤では満足度が二分法的志向を高め、中盤では二分法的思考が満足度を高め、さらに終盤では二分法的思考が満足度を低める傾向が示された。

これまで、二分法的思考は自尊心と有意な相関を示さないことが明らかにされている。本研究で見出された二分法的思考と満足度との間の正の関連や相互の影響関係には、ディベートを用いた授業場面という環境要因が影響している可能性がある。

ディベートの授業そのものには、二分法的思考を抑制する効果は見出されなかった。しかし、ディベートの授業が直接的に二分法的思考を抑制するのではなく、他の変数と影響し合いながらともに変化していく可能性が示唆されたといえるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 金政祐司・相馬敏彦・小塩真司・結城雅樹・橋本 剛 (2012). 拡がる世界、狭まる視界—適応方略の不合理性、不合理な心性の合理性— 対人社会心理学研究, **12**, 1-22.
- ② Oshio, A. (2012). Relationship between dichotomous thinking and music preferences among Japanese undergraduates. *Social Behavior and Personality: An International Journal*,

40, 567-574.

DOI: 10.2224/sbp.2012.40.4.567

- ③ Oshio, A. & Meshkova, T. (2012). Eating disorders, body image, and dichotomous thinking among Japanese and Russian college women. *Health*, **4**, 392-339.

DOI: 10.4236/health.2012.47062

- ④ Oshio, A. (2012). Dichotomous thinking leads to entity theories of human ability. *Psychology Research*, **2**, 369-375.

- ⑤ Oshio, A. (2012). An all-or-nothing thinking turns into darkness: Relations between dichotomous thinking and personality disorders. *Japanese Psychological Research*, **54**, 424-429.

DOI:10.1111/j.1468-5884.2012.00515.

x

[学会発表] (計 11 件)

- ① Oshio, A. (2010). The relations between dichotomous thinking and personality disorders. *Poster presented at the 15th European Conference on Personality Psychology*, Brno Czech.
- ② 小塩真司・中間玲子 (2010). 現代青年におけるポジティブ信奉の功罪(2)－他の指標との関連－ 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 59. (大阪大学)
- ③ 小塩真司 (2010). 二分法的思考とパーソナリティ障害傾向との関連－階層モデルと影響関係の検討－ 日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会発表論文集, 128. (慶応義塾大学)
- ④ Oshio, A. (2011). Dichotomous thinker's world-view: Focusing on entity vs. incremental theory. *Poster presented at the ISSID 2011 (International Society for the Study of Individual Differences)*, London UK. (25-28 July)
- ⑤ 小林弘幸・小塩真司・大平英樹 (2011). 主観的差の判断の基礎的研究 日本感情心理学会第 19 回・日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会合同大会発表論文集, 88. (京都光華女子大学)
- ⑥ 小塩真司 (2011). 二分法的思考と暗黙の知能観 日本感情心理学会第 19 回・日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会合同大会発表論文集, 136. (京都光華女子大学)
- ⑦ 小塩真司・Tatiana Meshkova (2012). 二分法的な思考態度が摂食障害傾向に及ぼす影響 日本発達心理学会第 23 回

大会発表論文集, 666. (名古屋国際会議場)

- ⑧ Oshio, A. & Meshkova, T. (2012). Thinking style and women's body image: A cross-cultural comparative study between Japan and Russia. Poster presentation at the 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego U.S.A. (January 26-28)
- ⑨ Oshio, A. & Meshkova, T. (2012). Effects of thinking style on body image and eating disorder in Japan and Russia. Poster presentation at the 16th European Conference on Personality (ECP16), Trieste, Italy. (July 10-14)
- ⑩ 小塩真司 (2012). 二分法的思考と知能は関連するか? 日本パーソナリティ心理学会第21回大会発表論文集, 134. (島根県民会館)
- ⑪ 小塩真司 (2012). ディベートの授業が二分法的思考に及ぼす影響 日本教育心理学会第54回総会, 758. (琉球大学)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

二分法的思考態度に関する研究

http://www.f.waseda.jp/oshio.at/research/pages/page_dichotomous.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小塩 真司 (OSHIO ATSUSHI)

早稲田大学・文学学術院・准教授

研究者番号: 60343654